

静岡新聞

大自在

かんがい施設は、とりわけ発展途上国の人々にとって、命をつなぐ血管のような存在といつてもいいかもしれない。張り巡らされた水路は荒涼とした大地を潤し、豊かな農地に変えていく▼「医療以前に必要なのが水。飢えや渴きは薬では治せない」。以前、アフガニスタンに造ったかんがい施設が洪水被害に遭い、復旧支援を訴えた非政府組織(NGO)の責任者の声が印象にある。水が届かなければ、農地は再び岩と砂の大地に戻り、民の暮らしを圧迫する▼歴史や優れた技術があり、社会的な価値も認められた施設を「世界かんがい施設遺産」として登録する制度が創設されたのも、その重要性が世界標準になってきたからだろう。かけがえない施設という点では、途上国も先進国もない▼清流の復活で知られる三島市の源兵衛川が先ごろ、世界かんがい施設遺産に登録された。県内では深良用水(裾野市)に次いで2カ所目。16世紀ごろ、湧水を水源に開削した農業用水路で全長1・5キロ。稲作に適した水温に上げるため水深を浅くするなど工夫し、今も水田に安定供給している▼心地よい清流の音を演出したのは、もちろん献身的な努力を重ねた多くの市民だ。ごみ投棄や家庭雑排水の流入などで環境悪化した源兵衛川を手作業で少しずつ再生していった。合言葉は「右手にスコップ、左手に缶ビール」▼かつてその取り組みを継続的に取材した。毎回、伝わってきたのは和やかな雰囲気。楽しみながらの思いがにじんできたように思う。せせらぎの再生も合言葉あってこそだろう。